

令和2年から3年越しで、若い頃お世話になったアメリカ人との再会を待ち望んでいたが、コロナ禍の中でついになかなかつた。誠に残念、無念である。

お盆が過ぎたある日、一通の航空便がわが家に届いた。開封すると「ヨシ、今年こそは妻と一緒に日本へクルーズ船で行ける。詳細はスケジュールを見てくれ」とのこと。

「一足先に帰る妻に成田空港で会ってほしい。その後、私は自由になるから、43年のブランクを埋めるべく時間を取ろうじゃないか」。そして最後に成田から出国する彼のフライトスケジュールまで添えてあった。びっくりするとともに一抹の不安に駆られた。外国からのクルーズ船が日本に入港できるのか、個人が自由に行動できるのか、関係省庁に問

い合わせてみた。案の定、日本政府としては「ノー」の返答であった。ところが、9月から入国者数を1日5万人にするという発表があったので、クルーズ船の受け入れ会社に少し期待を込めて確認したら、代理店からキャンセルの申し出があったことを告げられ、後日、彼からもその旨の手紙が届いた。

再会はかなわず

届いた。

彼は92歳になるだろうか。今年が

点差

こうさてん

最後のチャンスと思い、私に会うことを夢見てクルーズ船で日本を目指そうと計画したのだろう。しかし、コロナ感染症が大きな壁となった。早く終息して、皆が以前のように安心して旅行や活動ができる日が待ち遠しい。もちろん、彼との友情はクリスマスカードの交換で続けるつもりだ。

(安曇野市穂高、荻原義重、78歳)